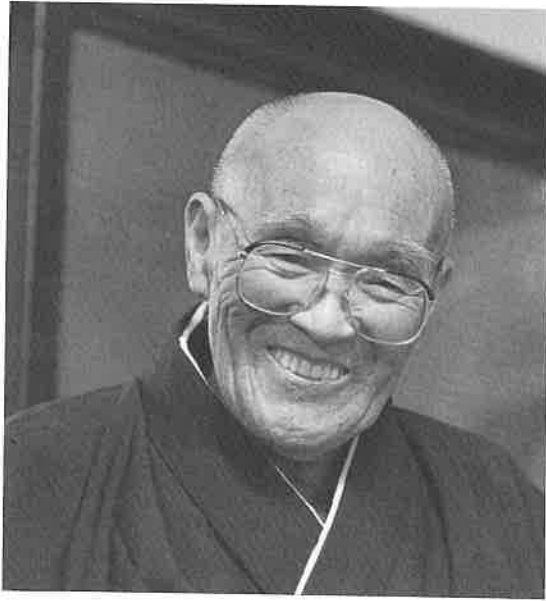


ふるさとへ還るおみやげ



遠藤 太 禅

福島県西隆寺住職

奥会津の山の寺から出て参りました。

趣味と云うわけではございませんが、私はよく観音様の写佛を致します。今年は正月から不動様を描いて居りますが、不動様らしい不動様が描けないでおりました。この度靈験れいげんあらたな不動様の善光寺様へ参る事が出来たのは何かの因縁かと存じます。

不動様は皆さん御存知の如く頭上に八葉の蓮華を頂いて居ます。特徴ある口に牙を出し、右手に剣を持ち、左手に索つなを握にぎって磐石ばんじやくの上うへに坐し、または立ち、後に火焰を背負せおっておられる。この利剣で煩惱の悪魔を切り、索は迷いの道に

ふみ込む人々を縛つても引きもどし、そうした人々を救おうとする柔剛二段がまえの姿で究極の大慈悲の姿であります。

人は皆善行をすれば成仏する筈でありますのに、死後の後生を願う為に佛を礼拝するようになってしまいました。



不動様ははじめから今日迄現世祈禱の第一位となっております。

背負っている火焰は、不動様の烈しい慈悲の心の現れでございませう。

親が子供を叱るのでも決して憎くて叱るのでなく、心の中で泣いて叱っているんです。不動

様は恐ろしげな御顔と姿をしておられますが御心の中で泣いているに違いありません。

会津に三コロリ観音様がございます。その三ヶ所の観音に祈るとコロリと死ねると云うのでお年寄りの参拝が絶えません。

私の寺の境内に三十三体の乙女観音が立って居りまして沢山の方が参ります。ある日遠くから来たと云う老婦人が一体一体丁寧に参拝しました。帰りに寺に寄った折お茶を出しながら「おばあちゃん、随分丁寧に参りされたけれど何を祈られましたか？」と尋ねると

「勿論コロリと死なして下さいと祈りました」と当然の如き様子でした。

「悲しい事をお祈りしたんですね。私達は生きています。何時来るか知れない死の事など考えないで、生きています。うちは真剣に生きていますね。死ぬなんて余計な事を考えないで、生きるとは働く事、今日一日しっかりと自分を

働かせる事です。

コロツと死にたいなんて取り越し苦労なんて止しましょうよ。」

老婦人は妙な顔してました。

「私はね観音様を拝む時、合掌してお姿に向い、目をつぶらないでしっかりお目を見るのです。目をつぶると雑念や慾念が湧いて来るから自分の目と観音様の御目と真直に釣り合わせるんです、真直に釣り合わせるから、これを祭りと言っておるんです。お祭りとは神さまと私が真直に釣り合う事なんです。」

観音様を見ていると「何と美しくやさしいお顔だろう」と思う。今にも泣き出しそうにそれをじっとこらえてかすかな微笑をして居られる。働^{ドウガク}哭寸前の微笑と言って居りますが観音様のはかり知れぬ慈悲心が身体に感ずる迄じっと見つめるんです。

観音を見つめて感じた想いは私の心の底の底



で、同じ思いがあるからそう感ずるんです。

美しさもやさしさも慟哭寸前の微笑も私の心の奥底に、もう一人の私として存在していたんです。観音様をじっと見上げるとそんな素直な気持になれるのです。

観音と同じ心が私の中に息づいていたのです。お姿を拝む事はお姿を鏡として私の中の観音の姿を写してくださることです。

私は観音様にこう祈ります。

観音様。私が年老いてどんな死ざまをするかわからないけれど娘や嫁達にこう言いたい、

「その時はどうかよろしく頼むからなあ」と素直に言える様な、その素直な心を私に下さいと祈ります。」

そう言うとき老婦人は出されたお茶を呑みもしないで下を向いたま、しばらくじっとして動かなかった。夕暮は急に暗くなりはじめた。

やがて顔を上げるとボソリと言ったんです。

「何んて私は頑固者だったでしょう。嫁や他人の厄介になるもんか、自分の事は自分ですると言う頑固者でした。観音様におわびして帰ります」と云うと急ぎ帰り仕度をして暗くなつたのに三十三の観音様一体一体おわびする様に頭を下げ合掌したのです。私はそのうしろ姿を見て、何て素直なんだろう、この姿こそ観世音菩薩だと合掌して見送りました。

み佛を拜むと云う時に目をつぶってはいけないものです。じつと御目を見て、み佛の中に自分を投げ込んでしまうと、み佛は私の中に入つて来て下さるんです。お経の文の中に入我々入と云つて居りますが祈りとはこの入我々入だと思ひます。

多くの人が神様佛様を拜む時、目を閉じて御利益を沢山並べてこうして欲しいあゝして欲しいと祈るけれども、私達が合掌して拜む前に諸佛諸菩薩は合掌して私達を先に拜んでいてくれ

ておるんです。そうしてこう言つておられます。

「私が今拜んでいる貴方よ、貴方の中にピカリと光るものを拜んでいるのです。それが本当の貴方であり貴方が観世音菩薩であります。早くその事に気付いておくれ。貴方の中の観音様には無限の力がある事に気付いておくれ」と、そう言つて居られるのです。

自分が佛様方に拜まれて居る事を知つた時、何と勿体ない事だろうと、言いしれぬ勇氣が湧き出してきますのです。

私は非常に汗かきです。だから遠くに行く時はハンカチを三四枚は用意するんですが、七月の末、遠くの町にお話に行つた時に忘れて一枚しか持つて行きませんでした。汽車の中から汗を拭き、会場で一時間半お話をして控室に帰つたら、お手伝していた奥さんが来て、

「先生、そのハンカチ借して下さい。サツと洗つて来ます」と云うので渡したら、三分もた、

ないうちにきれいにアイロンまでかけて持って来てくれました。

「奥さん、きれいだね。どうしてきれいなんです？」ときくと、「洗たくしたから」という。

「洗たくするとどうしてきれいなんです？」

「汗やごみやほこりが全部落ちてしまったからでしょう」

「くだいようだけれど汗や塵やほこりが落ちてしまうとなんで美しいんでしょう」

奥さんは妙な顔して笑い乍ら去りました。

汗やごみやほこりが洗い流されたらハンカチはたゞのハンカチになったんです。私達は汗やごみほこり、そのほかにももっと色んなものを心の中に一杯つめ込んで居ます。せめてお寺へ参る時や話をきく時は、心の中の沢山の荷物をすっきり捨て、ただの私になりたいものですね。

たゞの私って非常に美しいものです。唯の私

になった時人間としての純粋性、即ち素直さが
出て美しくなるんじゃないだろうか？ 余りに
も沢山の荷物を背負ってうんうんうなり乍ら歩
くなんて馬鹿げています。

禅宗の坐禅などは心の中からあらゆるものを
捨てる事なんです、人間だからいろいろな欲
を持つています。しかし慾にも大慾と少慾があ
ります。

佛教は慾を捨てる事だと思つてますが慾がな
かったら死ぬしかありません。そんな事をお釈
迦様は決して言われなかった。

人間には五慾と云つて大別して五つの慾があ
り、それで三毒と云うむさぼりといかりとおろ
かさが現れて、自分だけでなく周囲まで暗くし
ます。

どうしても自分を中心として、慾は果てしな
くとめどなく広がり、他の事を考えられなくな
り、混乱と不平不満、嫉妬、恐怖と苦をまき散

らします。

大体私達はまことに豊富に大自然から与えられております。無限といえる程豊に与えられている事に気がつかないでけち臭い小慾に夢中になって不幸を自ら造っているのです。

生きる上で最も大切な空気もどんな科学者でも造る事の出来ない水。水や空気に感謝する事などほとんど知らないで粗末にし汚染しきたなくしている現代です。

お釈迦様は慾を起すなとは言われない。慾もほどほどにと言われているのです。そうでなくとも私たちは必要なものは必要な時に必要なだけ存分に与えられているのです。水も空気も財宝も必要以上に与えられたら苦痛になるだけです。

しかし私達には願望があります。佛教は必要な願望を成就させる為に、大虚空を蔵として欲するもの好ましきものを与えてくれる虚空蔵菩薩

薩がおられるわけです。

凡夫の私達は小慾にふりまわされて居りますが、世界中で一番大きな慾を持った人がお釈迦様ではなかったでしょうか。

生老病死の四苦を四樂に変え、人間として最高の悦びの生き方の根本的原理を悟られて、御入滅になる八十歳迄旅して歩いて、現在の人は勿論未来永久に生れて来る人間に最高の幸福な生き方を伝えたいと云う大慾を起されたのであります。これ程大きな慾はないでしょう。

自分中心の慾はどんなに大きくても苦惱の種になる小慾でしかありません。

自分中心のケチ臭い小慾をみんなの為に自分を思い切つて広げて、その上に立つ願望を持つ事によって成就するのです。

物に法則や定理があると同じく、心にも法則定理が頑と存在しております。

法則の外側に出る事は出来ません。

心はコロコロ変化するから転げるのをコロコロ
と言うのかしれません。



心の法則とは、心に思ったものは実現する、
心で認めたものは実現すると云う法則です。



それが為に心の内からもよおしたものをすぐ行動化する。それを断行する勇氣を持つ事です。

心に認めたものが深く潜在意識に刻み込まれて念となります。念と念が重なり積んで業即ち働らきとなって実現するのであります。これが願望や実現の法則です。だから奪うものは奪われ、与えるものは与られるのです。布施するものは布施されるのです。人の心を傷つければ自分も必ず誰からか心を傷けられる。この原理に落ちこぼれは無いのであります。

心と云うものは力であり磁力を持っているわけです。唯その姿や形を見る事が出来ないから、常に不平不満を言っておればその人は、不平不満をあらゆる処から引きよせて不平不満の不幸な人生を送るしかありません。

不幸な人とは、それが天から与えられたのもなく、めぐり合わせでも偶然でもなく自分の責任によって集めて来るのです。

幸福も亦自分の心が幸福を引きよせているのです。

日常生活に於て、今私に与えられている事に感謝する心の経行をすべきです。父母と祖先に感謝する事が土台となるわけです。父と母、父と母と十代さかのぼれば先祖の父母は千何百人になると云う。そのルーツのうち一人いなくても私と云う存在はありません。私一人は千何百人の凝結した私であつて、私の中に先祖が生きているわけです。先祖を大切にするとはその様な沢山の先祖を背負っているのだから自分を大切に且つ尊敬しなければ先祖を大切にしていると云われません。自分一人だけの慾望は沢山の先祖達に対する粗末極まる慾であつて成就は出来ません。

夫唱婦随と云う事は封建時代当然だったでしょうが、今私達は夫唱婦和が天地の法則である事を信じています。

願望成就にせひとも忘れてならない事が二三あります。

先ず他から同情やいたわりを求むる心を断然とすてる事。自分が罪惡深重の凡夫であると卑下する事を止める事。さとり澄ました如く清く貧しくと云う清貧礼讚の思いを放棄する事です。自然は豊かに我々に与えてくれているのだから、だから他人の健康や成功や幸福をそねむ(嫉妬)のでなく、私が事として悦ぶ心の習慣。自分は勞せずして喜ぶことは幸福の福の神を招きよせる磁力を出すわけです。明るい心で毎日の人生を歓迎する。こうして毎日の自分の心の径行をして行けば願望はすべて心に思い認めたものが現実として具象化するのであります。

この人の人生は幸福になるしか無いのです。不幸な人の心の経行となるものは先づ不平不満愚痴を言わないと話題のない人で、人の幸福や成功をいつでも羨望嫉妬し他の欠点を嫌悪す

る余り惡意惡言を弄もてあそび、来もしない不幸や變事に不安と恐怖をあとおり立て、取り越し苦勞や持越し苦勞につかれ果て、常に變事惡事に心配苦勞する。毎日こうした世界に自分の心の住居を置き、それを心の歩く道としたならば惡の願望だけ成就して不幸な人生を送るわけです。

幸福しあわせになるには健康で寛容で感謝が習慣になつていれば明るい毎日しかその人にはやつて来ないのであります。

お不動様のお姿を見るとあの劍でマイナスの惡の想念を切り破り、それでも惡に近づこうと云う人の心をあの左手のひもで縛りつけても引っ張つて来て、頭に戴く八葉の蓮華の座に乗せて幸福の世界へ連れて行く尊い慈悲とたくましい働きを感じるのでございます。

私の寺の境内に十年程前ですが三十三体の乙女觀音の石像を建立しました。それは今までの此の世で逢つた觀音様ばかりです。私の今までの

人生上で逢った観音様だからむつかしい名前はついてません。恋慕観音とかトンボ観音、せせらぎ観音とかスマレかんのんと私達の生活に身近かな御名の観音様達です。

その中に「子恩観音」と云う観音様がござい
ます。側にこんな詩を書いて置きました。

私がわたしになる為に

私がに与えられた子供達

片身のせまい思いをさせまいと

無気力でしょぼくれ姿

正体もないへべれけの姿

いやしげな姿も見せたくない

苦勞も貧しさも超えて

清く正しくふるい立つ力を

与えてくれたのは子供たち

しみじみと子の恩を思う

今まで生きて来た悦び

合掌して有難とうと拝む

私が私になるために

観音さまが私の子供となつて

私のまえに現われて下さつたと

本当に私は信じています

毎日いろんな処からそれも近くの人より遠い処から参拝の人がお参りにおいでになります。

子恩かんのんの前で、いつまでも立つてひそ

かに泣いて行く女の人を何回か見ました。

大事な子供を先立たせたお母さんだろうか、

或は親にそむいた罪を感じた人だろうか。私

はそつとしてその悲しみを掘り出す様な無作法

はすまいと思つてます。

子供に対して有難うと合掌する気持が湧いた

時始めて親になつたと言えるでしょう。

子供がいたから此の子の肩身を狭くさせまい

と、親である私は下手くそでも曲りなりでも、人生

を恥ずかしくない様に素直に正しく歩こうと努

力して来ました。もしも子供がいなかったら平

気で悪い事などしたかもしれません。

観音様が私の子供の姿になって私を導いてくれたと心からそう思うのです。

人生と云う旅は長い。その長い旅は不幸になるより幸福の旅でありよろこびの旅でありたいと希つて居ります。最後に、詩人高見順はガンと宣告され目をつぶるまでの短い人生の旅に最高の意義深き人生を送つた方でございます。

こんな詩でした。

帰る処があるから旅は楽しい

旅の苦しさを樂しめるのも

いつか我が家に戻れるからだ

だから、駅前の塩からいラーメンがうまかつたり

つたり

どこにでもあるコケシの店をのぞいて

おみやげを捜したりする

この旅は、大自然に還る旅である

還るところがある旅だから

楽しくなければならぬのだ

やがて大地に戻るだろう

おみやげを買わなくてもいいのか

人間死ぬんじやない。魂のふるさと、生命の自分のふる里へ帰るのだから 楽しくなければならぬのだと思う。

人生とは楽しくなければならぬのだと断言しております。

そしてその生命のふる里に何をおみやげに持つて行く可きかと鋭い一言を私達に残してくれました。

「おみやげを買わなくてもいいのか」と私も

亦この一言を皆さんにお伝えしたい。

その日までおみやげを求めて下さい。

私は私なりのお土産を持つて行くこうと思つております。それは、

「生れて来た時の赤ん坊と同じ様な素直な心」それを、おみやげとして持つて行きたいと思うのです。